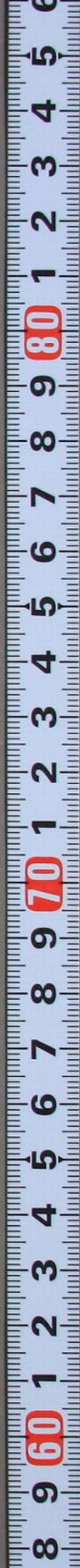
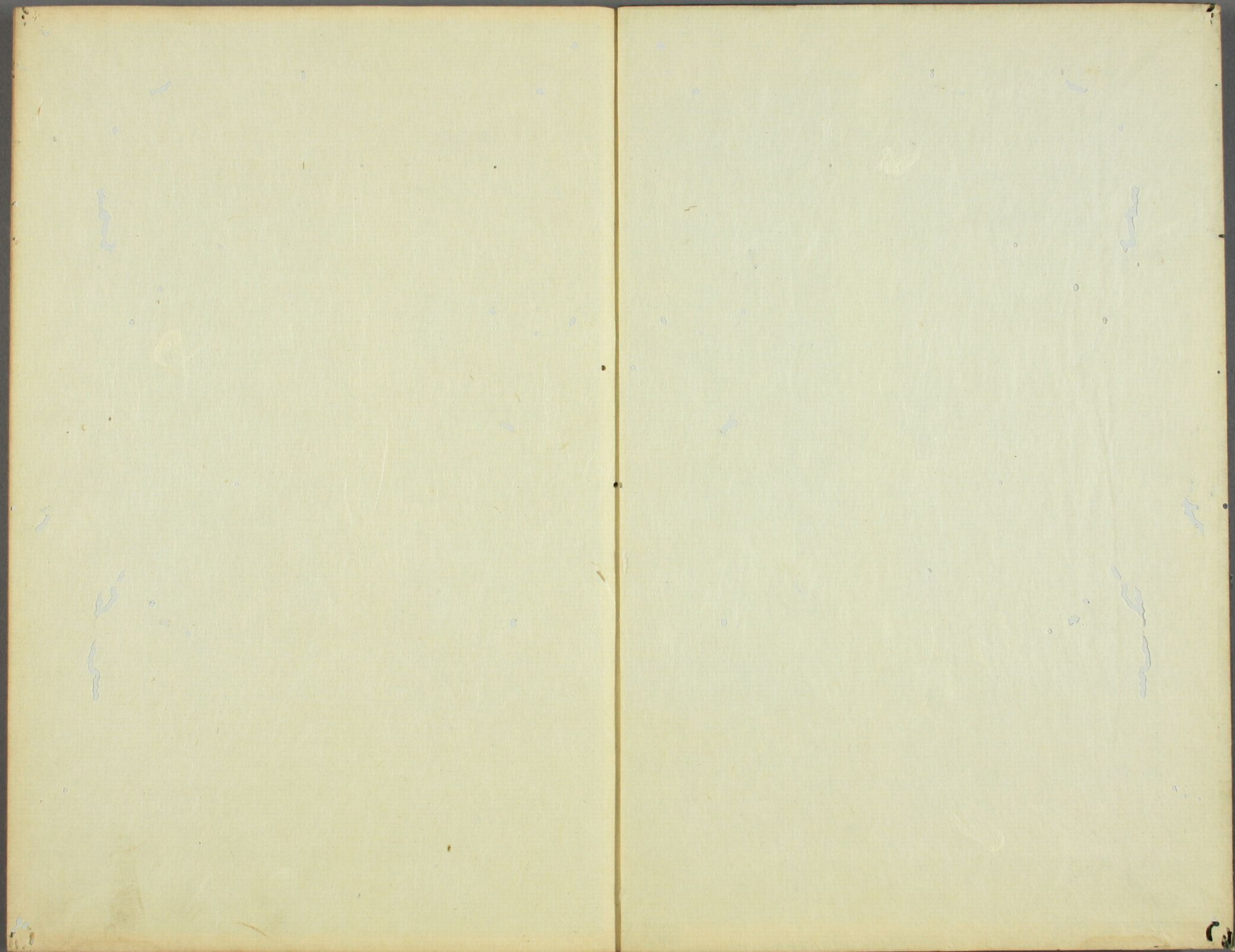


詞のとほのそ





詞瓊綸二之卷

為里より上へり登るて小をば

七

古二の字をいふて... 七の字をいふて... 七の字をいふて...



古八 よ 我 小 の こ ち ひ や こ こ ん ち 山 乃 ゆ き え る べ く も 何 ぬ 赤 牙 を

古九 阿 づ さ う む き を 本 中 急 こ が こ 小 よ る 丁 を よ る れ 意 の こ ら を

古十 阿 ふ こ う り 新 ま ち く せ バ う ね の 種 小 と 川 ぞ 清 あ る 阿 ら ぬ は 取 を

古十一 と と か く せ り か ま は 葉 の 足 ぬ ふ り づ ハ 家 の 阿 里 ど こ ら を

古十二 阿 ま ぬ ら 川 津 の 旁 れ ぬ る ぐ 尔 を ち 方 人 の 袖 の 足 ぬ る を

古十三 吾 は 肝 ふ ら く え れ ど あ り ら ま よ る ふ れ 世 さ 人 の と め ふ を

古十四 ち を や 婦 の 神 代 も さ う げ 三 田 川 つ く き あ み ふ ぬ く と を



日十八 男のさや ぶちけらうれしおとろへく 何れかきとけいぞうせんを

む

秋はな 雑歌 新成 桜花 ぶちけらうれしおとろへく 何れかきとけいぞうせんを

右二 のりかくちろ雑歌とけい けくくをみるよの中をてしうりれを

日六 山里をめぐりて ひとあや茶もりれぬとどくを

日十一 かりてせし男のみとてはるまじがふと妹 ちちや一人しげをを 清

日十二 おろかなる涙を神より 玉をあふ 人をせぬあへん 流つせぬれを

はるまじのてを 新成 桜花 ぶちけらうれしおとろへく 何れかきとけいぞうせんを

後五 秋萩を色どる 風をさそぬとて 心をわけし 草をみあはぬを

後十 日十五 いふせん 山のももけいとてさうらふ 流つせぬれと 出ん月をを

まじりてとてさうらふ 流つせぬれと 出ん月をを
上へつりてとてさうらふ 流つせぬれと 出ん月をを
中へつりてとてさうらふ 流つせぬれと 出ん月をを
下へつりてとてさうらふ 流つせぬれと 出ん月をを

記

日十八 けせをとくゆきを 吹くんとあふるとわち乃里にまみうりしを

日八 大井川 何處に去るはくしとて かくみゆきやあふる むしを

後六 日六 木葉をちる 宿をさ けくくしてあふるとわち乃里にまみうりしを

日八 おとさうや 秋のひくくぶの山ぞく ちちあひまはるむをめぐるを

新六 日六 ちちあひまはるむ ちちあひまはるむ ちちあひまはるむ ちちあひまはるむ

後十五 日十五 阿彌の山の 阿彌の山の 阿彌の山の 阿彌の山の

新十七 日十七 木くやんは 木くやんは 木くやんは 木くやんは

日四 日四 秋をさく 秋をさく 秋をさく 秋をさく

後十 日十 日十 日十 日十

新編 権政

十一 夕暮を^レ見^レて^レは^レも^レて^レは^レ物ぞ^レい^レふ^レ 何ま^レの^レ言^レある^レ人^レを^レと^レふ^レと^レ 下

新 十一 秋の^レ終^レる^レを^レ見^レて^レは^レ 君と^レい^レひ^レの^レ オを^レと^レふ^レと^レ 下

新 八 神を^レ人^レの^レ まを^レと^レふ^レと^レ 下

新 三 小云^レ神^レを^レ たを^レと^レふ^レと^レ 下

新 七 あり^レは^レあ^レぬ^レ うに^レ 下

新 六 後^レ あを^レと^レふ^レと^レ 下

新 五 後^レ あを^レと^レふ^レと^レ 下

新 四 後^レ あを^レと^レふ^レと^レ 下

新 三 後^レ あを^レと^レふ^レと^レ 下

新 二 後^レ あを^レと^レふ^レと^レ 下

新 一 後^レ あを^レと^レふ^レと^レ 下

志^レの^レ為^レり^レふ^レ上^レへ^レつ^レて^レ下^レに^レを^レふ^レく^レて^レ 下

あ^レは^レ何^レ 下

右 十五 月^レや^レ何^レぬ^レ妻^レや^レむ^レ 下

右 十四 う^レみ^レて^レ也^レな^レり^レて^レ 下

右 十三 け^レを^レと^レの^レ 下

新 十二 い^レせ^レの^レあ^レる^レ 下

凡 十一 形^レの^レ 下

凡 十 心^レが^レ宿^レを^レ 下

で

右 十 心^レが^レ宿^レを^レ 下

世のついでに
活用の世
そのついでに
ことごとく
世のついでに
活用の世
そのついでに
ことごとく

十一 花のついでに
又上へ花のついでに

又上へ花のついでに

十二 花のついでに

十三 花のついでに

十四 花のついでに

十五 花のついでに

十六 花のついでに

十七 花のついでに

十八 花のついでに

十九 花のついでに

二十 花のついでに

二十一 花のついでに

花のついでに

又上へ花のついでに

花のついでに

花のついでに

花のついでに

花のついでに

花のついでに

花のついでに

花のついでに

花のついでに

二十 花のついでに

二十一 花のついでに

二十二 花のついでに

二十三 花のついでに

二十四 花のついでに

二十五 花のついでに

二十六 花のついでに

二十七 花のついでに

二十八 花のついでに

二十九 花のついでに

三十 花のついでに

古

山風り枯く吹まればみこせある

べく

古

花のいろをまよふて又も花をうらむ人のまよふ

べく

まよふ

古

日ずるあよほどハきぬ小ありぬと花をうらむ月夜めぐる何ふ

まよふ

古

思ひおきて色うせしうらむつがはれち物や思ふとむとのとふ

まよふ

又上へちつて花にまよふとまよふとまよふとまよふ

古

つが君をま代り八代小き色石のいふかとあて昔のむす

まよふ

古

冬来てはよ二ふ花をまよふ花をまよふとまよふ

まよふ

まよふ

古

ゆいおてさうあやとらん

まよふ

ため
石を...
つが君のため
花のまよふ

の...
花のまよふ

古

おどろくぬまがさうらうらうりりれ

まよふ

まよふ

古

いとさあながぬく思はあまこ阿比バ

まよふ

古

阿方こそ此よ花あは人のありゆく

まよふ

まよふ

古

秋あふ阿ふことわきき女郎花

まよふ

古

思ふれを赤身を氣とまよふ

まよふ

まよふ

古

日りせまは山のさくくまよふ

まよふ

古

はまひるぬまよふ

まよふ

杉上へくさるる海りの松は若れ條々の外もせおわし准へさるべし

○あべうてふをはの辞めて海りを上へくさるる意のあハソリをさるみふ
その海りれてふをえのうあふ上への何の切も不どへうかやうにふを
正こちふ何ぞさるあを考ふべし皆への点より一の志をさるへ
りへさるる一を海の切もとてあはさるしと結る小後せふは極をさるる
海りれてふをはの或も袖夕の何れどへのさうさるる何の切も不どへ
えつらぬあれおむをいみふが正こちを先の何へをかつらぬを難ふ
何れれと切も前までへかつらぬを一首の流もこのを次とさるるべし

主あるてふをはの格

- 左 [と] [ぞ] の [や] [何] [丁] と主あるるつていおわしそのと記 [を] [せ] ハ
- 海く [ぞ] の [や] [何] [丁] と主あるるつていおわしそのと記 [を] [せ] ハ
- 右 [お] かく山りぬ葉つて日を晴麻のありまくとと記 [ぞ] 秋をうか [し] 記
- 日 [二] けくさるとちりぬととおひるい人のさる [ぞ] 風を吹あへ [ぬ]
- 左 [一] 進坂の雲もやまをせとらえつらんおともの山の [り] と [い] け [め] る
- 右 [六] みりし山此山のまじりてさかて入るし人の [の] おとづせとせ [ぬ]
- 日 [二] ちぬあべうてふをえふゆらんあをを重との [丁] と 花をちる [ら] ぬ
- 日 [十五] 人をぬりよころ木葉ふあふ [丁] と 風のまじりちりぬ [ぬ] せ [ぬ]
- 右 [や] [何] ちとせ件のあどせふあふととわらふべし

遠鏡ホあつてのへり
のうらりし片船字
めてとさるるやう

ぞや何了そ 八多びル主ある例あり
此中にやと何といまの字一ツの格
ありそは口の巻やの格了又白

のやと情をあるぞや何了そ と主あるは通之了そ 小主ある

ときハ了そ の格了了

後 一 津の玉此あるをたすくをしみ了そ 或く色たく火の下にぶかる

あどのぬあか三の巻ののの格了了

○ニ重小とのふるてふをを

ぞとやと

後 二 志の危りあうでころれ一袂をぞ 亦やけしと人のとが ぶる

ぞと何と

いのちをぞ いうあうんとハ思ひこし こそをかうふふ了そまられ

後 松 六 後集を大和や 小徳の和利君代の 了りといふぬたの

ぞと了と

新集 後村上院 氣をらるる雲取の月ぞ 秋をおさる時了そあせと ちやけくり ける

やと何と

新 十八 うをぐらん人のあがとにうびあてさうげや だせや 又まぶま べさ

了とやと

才務 花を了そ人やをるとてとがめしう 教あうぬををいうふりせせん

右のあおにニ重小とのへとらてふをはあらしと 』の志るし

をえんはとらるる

宗也如法 内書者 ゆふあときせり一後を月氣ぞ ぶうし せ せ と ぶひやう ぶ

こそせ日しくに重あを

變格

こまハ上リぞのや何苦の辞をおうべしぬるつるあるりせざるぬ
 ぬ不志とあし移ひて定むる格やそづきあうてふをそ不調とハ
 穿しぬあやを今つり不変格とあらざるをさくにせり

ぬる

一 うきをれみのしるるさうちまうて其さふりりとおとろくれ ぬる

十二 敷あしぬをそそあしをよし山さるれあがきをさしり ぬる

十三 みるしりづる何れれをぶくのりりあはくさしと物とをさし ぬる

十四 走水の戸をさしちぶまてつるうきあまのま川もさせ ぬる

十三 とこあはれをれさすきや秋風をま川の信もさし ぬる

十四 五木をくわづきれれをく記かて新皮乃うけとさ ぬる

十五 雪しよふ志がしとえがハあかりしを何れとハうりひて ぬる

十六 あまれゆるみるををばりまかへ川各草れ涙を ぬる

十七 みるめしそ入ぬるしそれをなす神をく波の下にくち ぬる

十八 う死しつとさむよハさくせいかととゆりといへ ぬる

十九 くさあや万阿とれとぐのてのおせさ子をさ ぬる

二十 うき身もは山田れおし祢おしとあれよを ぬる

伝る

井原に秋人ありしものうきさうつるあまの月ハさるれとわがしとあまの川を大に
 此のうきとつひに中をさしりてなうきとくやうをれもあてはさ
 かなのさうとつをれをいすも変格なるをいすもあてはさる

廿二 かけあふらつくとまれ神の信しくと赤身とつ小志を つる

後拾

こが宿り花をのこさずうつし極て麻のゆさぬ脱べとあし

つる

日九

八を菊り甚れ衣をおきそへく丸不衣がうろそし

つる

令九

家の風ふうぬものゆゑをけうしれ杜のまの葉ちしそを

つる

千五

けあみやれくはる松の山おろしにぬ葉を海乃物とあ

つる

日六

やうとをれましらのとら強引を急つうこのとどちとくり

つる

新九

えがくと君がうくべまき使を何やーやとぬる袖のうを

つる

右十二

あひ小あひり物おすくらのこが袖小やとる月とぬうがふ

あふ

玉十
定九

こひらびれ衣とあがむる夕暮母あはれを人ぬりてつが

あふ

ける

後拾

ハ

妻を花秋を月とと舞まつくをくれとおきそざり

りる

新十七

次三の冥夢をくかぬ信の音強おひれせしうて宿をく

りる

蹟拾十三
室原七

をい先よを何やちこれとまあがうあつそまて人をい

りる

せふ

後十九

むぐぐの山旅をくくこはよきてこの末と小ぬ葉て

せふ

あふ

日八

あふしやちみやとれまのをあらん志づー絶せハ旅てみど

るく

新五

秋のよハちやち月りありハりまはらうりありや森覚せ

るく

ぬ

原氏
七

いしんを吹つてさる笛亦りさへつるされ言さへくさ

ぬ

新十五

うきれそ者とのこゆ袖ふとどめまてこがひつか人をおもむきせ ぬ

十七

此れ日乃あぐれ寝ふねとまてり川流の橋とどどさうへ ぬ

上件のもどせしづきも皆終りのうに教息のまけうてありの
下にうふ又よあどしし辞を加へてまてここのみおふ定まらぬ
おとくぬつありはませまふあど終びてはうりてよら
しめれよく味むえらうし

原氏
後をよ

いせ山つう記さきはるのむてまてこの橋あゆまむ り

けあふつささる河ふとさうもあてまてとらう り
らるよとらあまあぬぞこまてりしづきもまへまらうし

後拾
三

いらあらんちあむの百とこまてりまてこまてり つ

このあの上のとあまバ変換ハハ何さまてつうの下へのまてりしし辞を
くまへてまてり

新後拾八
後拾五

あまてりハハ何さまてり つ

後拾一

あまてりまてり し

は二首ありて下へまてりしし辞を加へて上へまてり

○あまバ変換を、右方おとくある味のあまらあて、その味をんりよ
くまへてりえまら場徳のうへまてりまてりいと稀あまてりあて、ハ代をま
中にまてりあて、三十首おみまてり
ハ代集の程の作者ハハ右の変換のたがひ
よあまらあまらあて、撰集ハハ入といとく
まてり
ありあまをまてりみまてりハハまてりまてりまてりしし辞をまてりしし
てあまその定まらぬ格あまてりまてりまてりまてりまてりまてりまてり
まてりまてりまてりまてりまてりまてりまてりまてりまてりまてりまてり
まてりまてりまてりまてりまてりまてりまてりまてりまてりまてりまてり

とねきり、いあしん人き思ひあはるるごとくちとね

○又一くさ

和歌八首恒二

のまこと詞の外小

小後撰十一系

源氏物語末下

の可をのせり

ありりんとけん

の字をよめる外

ふふふふふふ

のふふふふふ

さゆさゆさゆ

ありりんとけん

後十一

高きこにむらひひこあつ、有物を人なりきくもあまご

あふ

あふ

口十二

おのひせりきづきしる山まのたしん人きくもあまご

あふ

あふ

口十三

ほどきあつくさえりつるあまのめあはるる君ハ

あふ

あふ

口十四

たぐ山の思ひやまゐるふりあしん人きくもあまご

あふ

あふ

口十五

一ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふ

あふ

口十六

あつられたちあつして、るあまの神なりつるあまご

あふ

あふ

口十七

はくも祢の家まげりふ白を祢君しゆまふふふふハ

あふ

あふ

後十二

あまご川ありあ祢まをいあま物をまをまをうりのあま

あふ

あふ

拾十七

あまをみるあまきうしとてはくみのまを川時とあまあ

あふ

あふ

口十八

あつらるるあつたらよりあまあまあまあまあまあ

あふ

あふ

後拾

う水一さかたさすも人ともあま物をはくもあまあ

あふ

あふ

口十九

次戸のあまは浦とく祢のあまあまあまあまあまあ

あふ

あふ

口二十

まのうへを月了せまあまあまあまあまあまあ

あふ

あふ

口二十一

くさあまあまあまあまあまあまあまあまあ

あふ

あふ

口二十二

はるよりあまあまあまあまあまあまあまあ

あふ

あふ

口二十三

りよよりあまあまあまあまあまあまあまあ

あふ

あふ

口二十四

あまあまあまあまあまあまあまあまあ

あふ

あふ

口二十五

あつらるるあつたらよりあまあまあまあまあ

あふ

あふ

右のあどせいくといへまづるぬると跡ぶべき極ある後つと
むらびぬと跡つる事上のあまきむと何トさぬの変極あり
此極後世おかくらみあへて又

三
まねどちて之秋の下葉はまづさぬおくきて秋ハ ゆく まて ぬ
こせは何ト極あり

かゝるゆづる極

さだにや何ぞしてふをえをおもてさなび辞をた本ありゆ川
まけをぶる極

一
うたの花もが袖さきあひせと や むうの月ふとまもや

二
面影乃あめる月ぞやうらる や むうの持でれあごとふ
は二首ハ月ヤ何ぬまむうハさるあぬハオと川ちりとの身ウーと
ソハ本あり一首のまてまやむうハ何りことまとのと交うりのハ
まそのまてあうらるさやの跡びまて
かあにゆがりてさぶるものあり

三
君が代りあまぶ あ まを玉の跡乃 き くとまげ ま せ ま せ
こまに古今意一ハ系代まかあとかうり四まてあまずハ何を玉のをせんと
ソハまああり君が代りあまぶハ何を玉の跡をせんその玉の跡のまくとまげ
ままもまてあまぶまをままの跡びまは本ありにゆがりてま
の詞のまをまてまとのと交うるとまは

四
おのづから い く い く い く い く
こまに古今意一ハ系代まかあとかうり四まてあまずハ何を玉のをせんと
ソハまああり君が代りあまぶハ何を玉の跡をせんその玉の跡のまくとまげ
ままもまてあまぶまをままの跡びまは本ありにゆがりてま
の詞のまをまてまとのと交うるとまは

何とあそぶ此もさし 舟べのまきふらむりのて急むのどけ そ

つるまた川人の心の色やあふ うらみんとあしれをそのうらみ そ

人乃在也久しとふせと此のあしれうちやをさると 絶 そ

あそ

新 冬に春を今の中此方今何こといふささげは そ あそ

は多に新を今の中此方今何こといふささげは そと兼好つるへ 春に上の白のころをなことやうにいり 諸の上のうせうろく 何のさしどかへ 何のさのさのハ だるあふれもさるぬし 上のぞのや 何のさの辞ふるて ことあれるハ 八代集の中にたげ一 首のこの後の十三代集もた 玉葉 風推しのこまを 外の集もハ 一首をもつて

五 及山乃岩が松ささくぬあそ 何さうれさすの り あそ

日 吹風は午なりなるあそ 秋をぬと お あそ

日 何とあそぶるあそ 此 絶 金の そ あそ

日 何とあそぶるあそ 此 絶 金の そ あそ

風 何とあそぶるあそ 此 絶 金の そ あそ

日 夕日うつる柳のさ急乃 秋 風 そ あそ

日 人をあそぶるあそ 此 絶 金の そ あそ

日 何とあそぶるあそ 此 絶 金の そ あそ

日 何とあそぶるあそ 此 絶 金の そ あそ

日 何とあそぶるあそ 此 絶 金の そ あそ

おん 後 上りぞのや 何 そ あそ

あそ び そ あそ

の 才 首 そ あそ

たゞ三首なるにばあきをもては秋のそらしつらぬりともて
 不べし。撰集の外ハ古くハまゝにほあふ今年をバはあひて 玉葉風雅は
 のまゝにきんじうらば他とわかえくく〜
 前年のあきものめしと何せとまの〜
 つまぐすは二つの集ふハえいしを飲く〜
 おつらかたにてあきはれ〜
 も知べしわふ後世の人ハ玉葉風雅をバは秋のそら〜
 ふしひあ〜みり〜よみづるありハ二つの集ふ〜
 や何とわら〜を志もむまぶがわら〜
 ふきはま〜じん人ハは秋のそら〜
 琴の音は〜がめく〜

志

新初 十三

おいぬぎを今年をかりと思ひこ

風 十二

あ〜ぞう 志 遠き〜みこ〜り人ち〜

新初 十九

あ〜ぞう 志 へを身と思ひ出と志のぶ〜

右三首上ホぞのや何ぞの辞ありれば志のりふ〜
 どの〜もあ〜は二首はう〜
 志〜
 志〜

果

新 十八

あき佐 志 ころ又〜ある 志 あり〜
 志 思ひ〜人 何〜

新 十二

人より〜られり〜あが〜 志 月を〜れた〜

風 十七

よの中れ〜ま〜な〜 志 月〜の〜

右三首上ホぞのや何ぞの辞ありれば志のりふ〜
 のまゝにきんじうらば他とわかえくく〜
 前年のあきものめしと何せとまの〜

七 物語 **や** みのりれ小あふう枝のぐせつ 年月ゆきどまきり げんあき

おきやふとつ例ハおかくる中に右の二首ハヤの遊びとのそびまていふやふとつ例ハヤの遊びとあつたつものどー口の巻ヤの巻を考へて

五 集 **や** ありまじは峯のねと **や** 一の中枝よめる人と **や** 赤くあそめん

口の巻二の巻ハ
小二ツのやとた
とてきつ小遊び
たふ二首あまのま
二首あつていふ
あふ

口 **や** たちよと **や** リひ **や** やうきり 白雪はとくもあく梅小あそめん

五の巻二の巻ハの巻ハその都小はを二たみてまっ小あそめん梅あまのあ

七 集 **や** あふまふせそめと **や** うぐひのたけりま記小表はつぐめん

八 新 有栖川口あぐれをかりしねど **や** 芳は新ぞよあれぬ

七 新 牙を杖乃こがらやいづく多きあそめん月をのこ **や** ともらとあはれど

右の二首をヤヤドあそめん
何るるる

十六 **や** りゆり **や** おのがまべともうされふもしーうきん 笑うえが

いせハりゆりハたのがまべとやまべまをヤヤトおさどろあがへり
は誤り候

一 後 柳 **や** かしきたちをさそくぬ **や** みりしはれみう記がふふらなほこてん

五 後 柳 **や** 立田暇今 **や** 大ど急の叫びり **や** おをそへ 秋乃りんぞあそめん

は二首ヤヤトあそめん
あはあ

十七 新 後 柳 **や** 月やくあぬはれさこのう **や** せおちこけり **や** たてぬ煙あそめん

はあヤヤトおさどろあがへり上の巻と入りて
うやまびヤヤトあそめん

か

十一 後 柳 **や** ちやとつし 秋あはふは生ぬるをたの巻 **か** おそいあハいろを

はかやとつしあそめん
あはあ物あそめん
あはあ物あそめん

何

拾
十五

身此うきを人の情くると思ふ。家とていと **ト** 家とていと **ト**
はたきぬを写し阿やうきとあるべし。おひてハ切きあり
トそれらのてふをそにうきひぐさ

日
十六

かくむりまると **を** や郵ふちあききく **を** 返るう那
はむハ市の字一得る **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
これぞあるうのうふふり **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那

後拾
十三

東屋死くやが下 **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
はハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
ハハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那

後後
十二

阿かこれあぞさあせ **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
はハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
ハハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那

後拾
十一

花 **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
はハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
ハハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那

後拾
十

その返りの向 **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
はハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
ハハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那

秋衣

衣 **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
はハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
ハハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那

堀川

衣 **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
はハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
ハハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那

後拾
十九

衣 **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
はハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
ハハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那

後拾
十二

衣 **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
はハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
ハハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那

新
十二

衣 **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
はハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那
ハハハとて写し **を** 返るう那 **を** 返るう那 **を** 返るう那

新拾

あぬ人をち州秋風此祓どを火にられまへあや不穰どち あ

新六

夕を紀すともくもる浪をちり見ゆる小崎の雪ふまえ ぬ

詞三

秋の葉にちと婦人そあ紀ものをくみ秋とにまよとこ こ

新二十

しらくるせよがのそあぬ法や何とそ吹風す ぬ

玉十三

ゆらりあるらるゆられゆらりゆらり ぬ

凡十三

なふぞうに人ちえ ぬ

凡十三

うせやさばり ぬ

右のあさるしづせに上ふ阿きとも変格の例あれどちりや
しづふき ぬ

一本ルてホをばを写し誤せる哥

あせハ八代集の中にてホをち此 ぬ

今こそ如きの本どせを考へ合せて ぬ

ちれる方をバその右此 ぬ

ほくぞい人 ぬ

日がま ぬ

うね ぬ

玉 ぬ

ぬ

ぬ

十九 秋のねに東の院麻乃斗をへりあぞ 赤糸のり玉と **左** そい ちく

はあ結句のそいちを集中の本に皆ぞと何れはもよすあぞといへまはぞとすここのそい
べに結句にちとあるを甲用ぬべしはあれたるを乙用ぬるを丙用ぬるを丁用ぬるを

日 けりーにぬハ人ましくささ秋のしぐさぐさ秋をこ **か** そい ぬとうぬる

一 くらあみり色をばくへり梅さつとちとくふるふらさ **る** そい

二 表くをバくくをたを夕げくよおぶつりふ **し** くい せ山陰ふり

はあ才也のちのちのちと今本ハ皆くと何れ
誤ありハ結句とある秋のちと今本

三 風をさふちりけむの敷あやういづらう **さ** まい

日 色ぬりくちふびしちとハ後波のませう **う** ハイ

日 **も** ヤイ 天の海系をなせあんなをいひまかくだい後里あん

日 秋の寂れはささくれをたふをくをなめてぬき小 **ま** そい

日 秋風のをけをさすかふま **も** まそい よのちとくいと何れあとのつ

はあこハちを **あ** ぬしとささぬあせとささ後撰一あそれとおひかを
ねむるんささあと何れと何れと後 **あ** と今おおくのちふきと何れと何れと
てん **あ** 一首の結句のそい秋のちと今とある方秋用ひく **あ** とある
本を不用といへる説と **あ** なる説がさるるあぞ **あ**

日 ちあとりひし秋はるあさ秋の静ふたささ **ぞ** のい ちあさ **あ** つひ

日 秋うつる月のぬりハ秋のしぐさひりくぬ **あ** そい ぬと又え **は** つひ

日 秋をさば **あ** のい ぞみ **あ** そい ちみ **あ** そい

日 秋をさば **あ** のい ちみ **あ** そい ちみ **あ** そい

日 秋をさば **あ** のい ちみ **あ** そい ちみ **あ** そい

日 秋をさば **あ** のい ちみ **あ** そい ちみ **あ** そい

日 秋をさば **あ** のい ちみ **あ** そい ちみ **あ** そい

この一冊にて... 誤り... 十九の秋の神事... 麻のこと
いふ... 結句の... 上のを... 下まで... 麻の
... 何ぞと... 辞上... 下に...
... 下へ... 不調...
... 作者の詞人...
... 麻の...
... 麻の...
... 麻の...
... 麻の...

